被災体験 伝えたい

29日から山形・遊佐で津波防災ワークショップ

山形県遊佐町の漁村集落の津波防災まちづくりを考える住民ワークショップに、仙台高専名取キャンパス（名取市）で建築デザインを学ぶ学生らが参加、支援する。東日本大震災で被災した宮城、福島両県の出身者で、自宅が津波被害に遭った学生もいる。29日に始まる地元住民との協議に向け、学生らは「自分の被災体験を語り、少しでも教訓を伝えられたら」と意欲を燃やす。

仙台高専学生ら参加、支援

ワークショップの対象は遊佐町吹浦地区の「まちづくりセンター改築事業」。仙台高専名取キャンパスの都市計画研究室を中心とする学生ら8人が、ワークショップの進行・調整役を務める。学生のうち2人は、自宅周辺が津波で被災した。

事業は国の補助を受け、町が2013年度から2カ年で、鉄筋3階延べ床面積1200平方㍍の建物を新築する計画。センターは防災まちづくり拠点として「津波避難ビル」の機能も兼ねる。

本年度は建物配置や間取りなど設計の基本方針と、センターの機能や活用法などについて住民の意見要望をまとめる。

同地区は鳥海山の麓に広がる漁港や鉄道駅を中心とする集落で、人口は約100人。日本海沖で巨大地震が発生した場合、漁港付近で7・5㍍の津波浸水が、沿岸から数百㍍の距離にあるセンターでも約2㍍の浸水が想定され、避難場所確保が課題だ。

避難建物 住民と活用法考える

仙台高専の小地沢将之准教授（都市計画）は「近くに高台はあるが階段がきつく、積雪時には通行不能も考えられる。高齢者でも容易に避難できるよう、建物配置や避難方法について、住民と一緒に考えたい」と話す。

相馬市磯部地区で漁業を営む実家が全壊した4年生の星歩美さん(18)は「一人でも多くの命が助かることの大切さを震災で実感した。日本海側の人たちに危機意識を持ってもらうためにも、自分の古里での体験や避難の大切さを伝えられたら」と話している。

吹浦地区の立体模型づくりに取り組む学生ら＝名取市の仙台高専名取キャンパス

河北新報　2012.9.27